

「花喰うひとびと」

妹尾島華子（せのうじまはなこ）がその庭を見つけたのは偶然だった。

高校の帰り、下を向きながら歩いていると目の前を猫が通った。

猫は妹尾島華子と目を会わせる。

小さな猫の、小さな額には右から左へと斜めに線を引いたような傷があった。

妹尾島華子は母親とベット禁止のマンションに暮らして居るので、普段猫や犬などの動物には興味が無い。

猫は猫で目の前の真新しい制服を着た女の子を物珍しいのか、その真摯な眼で華子を見つめる。

黒い口ファアからスラリと伸びた長い足、短いスカートの上に細い腰、胸元のスカーフは胸の膨らみ併せて少し前に出ている。

整った顔と併せて何処か大人しい感じの外見だが、猫は気後れもせず。一別するとまた直ぐに歩き出した。

普段だったら華子は猫と目が会ったくらいでは特に思うところは無かったが、猫の興味のない視線で今日の学校での事を思い出した。

「妹尾島さんっていつもひとりね？」
学校が始まって一ヶ月以上がたって、隣の席のクラスメイトに始めて声を掛けられたのは随分と不躰な質問だった。

「ひとり？」

「だっていつもそうじゃない？」

華子の入った学校はお嬢様学校で、中学、高校、大学まで繋がっている女子校だ。クラスの前の子は中等部から上がった子が大半で、都内の地元の中学から進学してきた華子にはまだ気楽に話しかけられるクラスメイトは居なかった。

「やだ妹尾島さん、難しい顔して」

口元に手を当てながら考えている華子をクラスメイトは笑った。

そういえば中学の友達とも連絡を取っていなかった。結構メールのやり取りは友達としていたが、最近はあまりやり取りをしていない。

改めて考えると確かに今の自分には友達と言える人物は居なかった。

「本当に友達居ないの？」

隣の子の少し馬鹿にした風な言葉に、華子は怒る事もなくただ聞いていた。

「寂しくない？」

寂しかったらどうなのだろうか？ 仲間に入れてくれるとでもいうのだろうか？

どうも、華子はこの女子校の空気にはついて行けないものがあつた。

言いたい事がいちいち遠回しに感じてしまつた。

今回の件も一人で「さびしい」華子相手に友達になつてあげようという、偽善的な誘いなのか、ただの確認なのか良く分からない。

「別に寂しくはないけど？」

「そう？」

声を掛けた子は不思議そうな顔をしたあと、そのクラスメイトは友達に誘われて二人で仲よくトイレへと向かった。

その後ろ姿を見て、華子は中学校の事を思い出す。自分が通っていた中学生にそういう仲の良い女の子が居たが、ここでは自分以外は全部そうに見える。

何を行動するのにも一緒、みんな同じにならないと気が済まないのだ。

溜息をついて、ふと華子が周りを見渡すと、クラスの何人かが此方を見ている。

敵視するわけでもなく、ただ有るものを見ているという目だ。華子にはまるで見えない柵が目前に立っている。沢山の人の奇異な視線を受ける動物園の動物の気持ちもこんな感じなのだろうか。

華子は高校生活を楽しみにしていなかったと言ったら嘘になる、新しい友達にも期待していた。

でも、一つ噛み合わなければ何時までたつても噛み合わない。

なんで最初に躰いたのかは思い出せないのだが、華子は新しい環境に溶け込む事が出来なかった。

そんな華子の悩みなんかは気にもとめないで、猫はゆつくりと歩いて行く。そして時々華子の方を振り返ってはまた歩き出す。

見取れていた華子がふと気が付いたようにもう一度歩み始めると、猫も再び歩き出す。

そしてどち等が先に止まったのかわからない位、同時に足を止めてまた一匹と少女の目は会った。

一步、二歩、三歩と歩いて華子が足を止めると、猫は数歩歩いた所でまた華子の方を振り返る。

なんだか華子は追って追って歩く姿が面白くて、そのまま跡を付ける事にした。

猫は歩を止める事なく、やがて小さな路地に入っていた。綺麗に整備された住宅街の一步入った路地は狭く小さな階段があったり、出しっぱなしの花壇や鉢植えが並んでいる。

何時も学校帰りに通っている道に、こんな路地があるとは華子は気が付かなかった。

狭い路地の先、猫は再び額の傷を見せつけるかのように向こうの通りで待っていた。

まるで誘っているかのように、華子が近づくとまた猫は歩き始める。なんか昔見たアニメにこんな場面があったような、そう考えると華子は面白くなって猫の後を追う。家に帰っても面白い事は無いし、なにか新しい事を探しかけた。猫の追いかけてこは子どもっぽい、それなりに今の華子には追いかける理由があった。遊ぶ友達も居なくて暇なのが半分以上で、残り

は好奇心。
「あし」

路地を出て数メートル、少し狭い古い道路に出ると、猫の姿は突然壁の中に消えた。

よく見ると猫は古い木造の壁の敷居の一部分に青いシートが掛けられた所の隙間に入り込んでしまった。

華子の小さな追跡劇はあつという間に終わってしまった。
「こんな家あつたんだ・・・」

華子が今居る場所は整備された道路沿い、大きな家が並ぶ所から一つ路地を入った所だった。階段だらけの高台、コンクリートで固められた崖沿いの近く。猫が消えた壁の近くには急な坂道があつてこの辺は坂だらけで、自転車を通すのも疲れる場所だった。都内の山手線内だが、古い町並みも残す住宅街だ。

小さな木造の日本家屋の隣には大きな茶色いマンションが建っている。向こう隣にはコンクリートの壁に囲まれた大きな家が並んでいる。猫の消えた家だけ何かく、頼りない感じがする。

門の前には草木が多く、家の奥には木が一本青々と緑の葉を蓄えていて大きな影がたでさえ古い建物を暗く見せている。

「あつ？」
何となく猫の消えた家の近くによつて、華子は一つ気が付いた。

「表札が出てない」
簡易な鉄の柵の門を挟む柱にも、人目が付くところには表札らしきものがないも無かった。

ポストらしいものも特には見当たらない。それでも廃屋に見えないのは玄関周りは妙に小綺麗だったからだ。

道路に面した茶色い板の壁には、地面との間に小さな隙間があった。そこからの覗き込むのは躊躇したが、華子は好奇心に誘われるまま壁に掛かるビニールシートに近づくと、

ビニールシートは粘着テープで何力所か貼り付けられていたが、剥がれているところも多い。

華子はなんの疑問も持たずにビニールシートを捲って中を覗き込んだ。
「何これ？」

華子の目の前に広がるのは沢山の花たちが咲き乱れた窪地で、手入れされた花々が濃密に圧縮された空間だった。

古い家屋から、隣家と隣接している壁際の小さな木々に遮られた空間、華子の対面の場所には空が、小さな柵の向こうは大通りに面したビルに囲まれて狭い感じがするが、隣に建物が無く、空に浮かんでいるような庭だった。歴史に詳しい者ならパピロニアの空中庭園を思い出したかもしれない景色

だったが、華子にはそんな知識は無く、ただ草木が風になびいている姿に見とれた。

華子は急に恥ずかしくなったのは、何だか物語の主人公のように本当に宝物を見つけてしまったからだ。

風が空の方、岸壁の方から流れ込んでくる。

華子には今まで嗅いだ事の無いような濃密な空気が流れ込んでくる。

草の匂いにしては濃すぎて、花の臭いにしてはもっと生々しい匂い。ずっと都内で暮らしている華子にはあまり嗅いだ事のない土の匂いに、華子は驚いているのだが本人にはなんの匂いだから分からない。それくらい華子の覗いた庭の空気が嗅いだ事のない匂いだった。

「あっ」

堀の足下には大きな葉を持つ擬宝珠（ギボウシ）が庭に向かって密生している。ちょうど壊れた堀の部分だけが少しだけ歩けるように獣道になっている。

その道の先には先ほどの額に傷ついた猫が待っていたので、もしかしたら猫が作った獣道だろうか？

普段の華子であればこれ以上は深追いしなかったのだろうが、素晴らしい庭の雰囲気は何処か物語の中に入り込んだような高揚感を華子に与えて、年相応の好奇心が膨らんだ華子はそのまま輝く擬宝珠の中に口フアーで踏み込む。

「ぎゃ」

思ったより柔らかい足下に戸惑って、華子は坂道を駈け足で降りていく様に一気に庭まで走り込んだ。前のめりになりながらも、何とか転ばずに庭まで降りる。

降りてきたところからは華子の背丈以上の高さがあった。

庭に降りて改めて周りを見渡すと周りは華子の見た事のない草木が所狭しとひしめき合っている。

学校や公園で見たことのある花壇とは違う、華子の胸の高さまである草木の根本には小さな鉢植えが並んでいる。

庭には大きめの石で作られた道のようなものが続く、日本庭園にあるよう

な道だが、庭の中はイングリッシュガーデンのように良く言えば色とりどりの草木が生い茂っていて、悪く言えば森や荒地のように何でもありの様子だった。修学旅行で行った京都のお寺の庭と比べると、賑やかすぎると感じる庭で、華子には今まで見た事がない景色だ。

「凄……」

自分の視線の先に広がる沢山の草木を目の前にして、華子はただ呆れてしまった。

さっきまで街の中に居たのに、気が付いたら山の中に迷い込んでしまったみたいだ。それもただ荒れた山ではなく、誰かの意志によって整然と整えられた環境のようだ。

草木の先には空が見えて、遠くヒルの壁が見える。草木に囲まれたビルは何だか幻のようだった。

なんでこんな所に居るんだろうと考えるよりも、華子は見た事もない庭の景色にすっかり心を奪われて、追いかけてきた猫の事を忘れていた。それから華子の降り立った庭は素晴らしい草木の楽園だった。

風が吹き抜けると優しく草木は揺れる。その時草木の物陰から何か動く音が聞こえた。探していた猫かなと思つて華子は身を乗り出して草木を覗き込む。

「二日月か？」

華子が驚いて足を止める、草木の奥に人が座り込んでいた。

手に小さなスコップを握り込んでいた人物は一瞬お年寄りかと思つたが、立ち上がった姿は茶色いスカート揺らせた小さな女の子だった。

華子よりもずっと背が低く、中学生くらいの年頃だろうか？土を付けたままのスコップを握りながら、無表情に華子を一瞥する。

庭に入ってきた華子を女の子は驚くわけでもなく、背の高い華子を見上げるように視線を併せる。

大きな腫と短く肩口で切りそるえた髪。

小さな肩に薄い緑のカディガンを羽織って、庭仕事をしていたようで、彼女の足下には土が盛られて、まだ作業中と思われる植木が並んでいた。

「お主は何者じゃ？」

「えっ？」

華子が驚いたのはもちろん質問ではなく、彼女の口調だった。コットン生地の子猫の柔らかな服を纏った女の子からは想像できない言葉遣いにキツイ口調。華子には女の子が冗談で言っているように聞こえず、ただ後ずさりするだけだった。

「何者かと聞いている？」

片手に持ったスコップで華子を指しながら、女の子は少しずつ華子と距離を取る。

「ごっごめんない、勝手に入って来て」

「何処から入って来た？」

華子はおどおどしながら壁の青いシートを指さす。

シートは剥がれ掛かっている、大きな穴はその景色を写していた。

「ふむ、やはり壊れた壁はすぐに直さなければいかな」

不満そうに女の子は悪態をつく。

「ごめんない、その私・・・」

丁度二人の前に猫が、華子が追いかけて来た猫が植木鉢の山の中から出て来た。

「その子を追いかけてきたらここに来ちゃって、人が居るとは思わなくて・・・」

「三日月、久しぶりじゃのう」

手に持っていたスコップを地面に置いて、女の子は猫を抱きかかえる。少し笑った顔は歳相応に可愛らしい姿だ。

「その猫、猫を追いかけて来て、ここに着いたの」

「三日月を？」

「三日月って言うのその猫、あなたの飼い猫？」

「違う」

猫には首輪も付いて無かったが、抵抗もせず三日月と呼ばれた猫は女の子に抱かれて心地よさそうに目を細めていた。

「お主、三日月の知り合いか？」

「知り合い？」

「そうじゃ、ワシもこの三日月が普段何処で何をしているのか知らんじや」

女の子が猫の肩間の傷を優しく撫でると、猫は甘えた鳴き声を上げた。華子と会った時とは別の猫のように人懐っこい姿に華子は少し納得がいかなかった。

「私もさつき道で見かけたのが最初」

「ふむ、なら何故ここにきたんじや？」

「その猫と目があって誘われたような気がしたから・・・かな」

華子は自分で言っていて、なんと突飛な事を喋っているのだらうと思った。

暇だから付いてきただけなのに、猫のせいにしたのは、人の家の庭に勝手に入った後ろめたさも合った。

唐突な華子の告白に、庭には風もなくただ静かに時が流れている。

「ぶっ」

そんな静寂な空間に小さな失笑が響く。女の子は猫を抱きかかえたまま笑いを堪えている。

「わいはあ、猫に誘われたって凄いのう」

変な笑い方、徐々に笑い声は大きくなり、女の子は文字通り腹を、この時は猫を抱えて笑っていた。

流石に華子は恥ずかしくなって、制服の裾を握りしめて肩を振るわせる。

言っじやなかったと後悔したが、言わなきゃただの不法侵入だ。

それでも笑点の観客みたいに大笑いする女の子をみて華子はやっぱり言わなきゃよかったと思った。

「お前さんは本気で三日月を追いかけて回してこの庭に来たというんか？」

「ちょっとそこまで笑う事なの？」

「笑うじやろ、高校生にもなって猫を追いかけて他人の庭に迷い込むなんて何処までめでたい」

女の子の言う事は最もだったが、それが更に華子の怒りを増す。

「こんな草だらけの庭と古家に人が住んでるなんて思わなかったのよ！」

「そうか、すまんかったのうボロくて」

女の子は余裕で華子の嫌味を避ける、華子の怒りは益々怒りの行き場が無

くなくなった。

「ご覧の通りポロイ家と草木しかない場所じゃ」

三日月をだき抱えながら女の子はくるりと回ってみせる。

風が通って草花が揺れる。

春の陽光は緑と色とりどりの花々を照らす、目の前で屈託無く笑う女の子は何処か浮世離れしていた。

ニヤーと猫が鳴いた。

「すまんのう三日月、うるさかったか？」

子どもをあやす母親のように、女の子は三日月の頬にそっと唇を付けた。

「どうした三日月？」

猫が大きなあくびをした後、小さく絞り出すように鳴いた。

「ふむ」

女の子は顔を近づけて、猫の口元の動きを追う。

「なるほど」

華子の方を見て、また猫相手に頷く。

「そうじゃなお主が連れてきた客じゃ、丁重にお持てなしをしなければな」

猫を肩に抱いて、女の子は背の高い華子に人懐っこそうに話しかける。

「のう、お主は暇か？お茶でも飲んでいかなか？」

「えっ？」

「まあ、遠慮せんでええ、折角じゃこの庭ゆつくり見ていけ、三日月もそう

言っておる」

「猫の言葉分かるの？」

「分かるわけないじゃる」

また笑いながら、女の子は猫の背をさすってあげると、猫は細めた眼をさらに細くさせる。華子は肩を振るわせ頬を張っていた。

「ケイ、出てこい！」

華子の態度は気にも掛けず、女の子は古い家の方へ振り向いて、大きな声

で呼びかけた。

小さな窓が開くと、若い眼鏡を掛けた男が庭を覗き込む。

「なんだ姫さん？」

めんどくさそうな声の主は、まだ青年のようだが、些か頬が瘦けて頼りない感じの男だった。

「茶にする、居間に来い」

「まだ書類のまとめが終わって・・・」

「居間に来い」

青年が全部喋る前に女の子は命令して、男は悔しそうに窓枠を軽く叩いた。

「まだ三時のお茶には早いだろうに・・・また仕事が溜まるんだが」

ブックサと文句をいつているのだが、華子達には聞こえない。

女の子はさつきと猫の三日月を抱えたまま、古い木造の家屋へと歩いて行く。

庭との間に小さな丘、五、六段の石段を登ると開けっ放しの窓に居間がある。

「さっ早（はよ）う」

誘われるまま華子は家に入ろうとする。

「お前さん、姫さんの友達か？」

男に声を掛けられて違うと華子は首を振った。

「そうか」

納得して、男が少し残念そうな表情をしたので、華子はい見取れてしまっ

た。

さっきの女の子が言葉遣いを変だが、顔の整ったお嬢様とすれば、窓に寄り掛かる男は些か身体の弱い優男に見える。

親子には歳が近すぎるのが、かといって兄弟には絶対見えなかった。

男は制服姿の華子を上から下まで観察するように見る。

「でけえな」

小さい声でも人は悪口だけはよく聞こえる。

少し大股で歩いて、華子は始めて大きな庭を持つ小さな家になる事になった。